第一回
「心のままに時を過せる贅」
野の花亭こむらさき

「野の花、一輪選んでください」

「野の花亭こむらさき」は伊豆急下田駅から徒歩3分ほどの至近にある。車の往来が目立つ通り沿いながら、門をくぐればすっと静寂に包まれる。アジサイ、モミジ、ハナミズキ、そして宿の名でもあるコムラサキ……。たくさんの緑と季節の野の花が風にそよぎ、旅人を迎えてくれる。打ち水がされ、艶やかに黒光りする敷石を踏むと、玄関に至るまでのわずかな時間で、せわしない日常が潮が引くように消えていくのを感じた。

フロントの女性に促され、待合処に腰をおろす。奥に緑が生い茂る坪庭がある。涼やかな景色に見入っていると、「どうぞ」とお茶菓子が差し出された。「お疲れでしょう。こちらで一服してくださいね」。ねぎらいの言葉とともに、熱いおしぼりを手渡してくれる。宿の説明が終わると、庭の

手前に活けてある季節の花から一輪選んでくださいという。部屋に飾ってくれるとのこと。なんとも粋な計らいではないか。ヤマボウシ、ユリ、ホタルブクロ、キョウチクトウ、アジサイ……。そのなかから、私はロイヤルブルーのガクアジサイを選んだ。訪れたのは6月中旬。故郷下田ではアジサイ祭りが開催され、まちの至るところで大輪のアジサイが咲き誇っていた。

「野の花亭こむらさき」の客室は、「こぶし」「むらさき」「らん」「さくら草」「ききょう」の5部屋のみ。その頭文字をとると、「こ・む・ら・さ・き」になると、客室係の平井さんが教えてくれる。内回廊の最奥からひとつ手前、「さくら草」が私の部屋だ。靴を脱いで上がると、その贅沢な空間に驚いた。15畳の本間には1・5畳ほどの床の間があり、「桜草」

の書が掛けられている。奥には庭に面した6畳の部屋がつながり、掘りごたつ式の卓が据えられていた。敷地内にはいったい何種類の植物が植栽されているのだろう。濃淡のある緑の重なり合いを眺めながら、内と外を見事に遮断し、旅情を削がない配慮に感じ入りながら、私はすっかり旅行者の気分になっていた。

庭には竹を組んだ濡れ縁が敷かれ、石造りの露天風呂にはたっぷりのお湯。ここでは5部屋すべてに専用の露天風呂がついている。湯は、すぐ近くの蓮台寺温泉から源泉を引く100%掛け流しの天然温泉だ。湯に手を入れてみる。ちょうどいい湯加減。チェックインしたばかりだが、下田のまちを散策し、汗ばんだ体をさっぱりさせたい。気ままなひとり旅。夕食まで何をしようというわけでもない。気の済むまで湯に浸かり、庭の

木立を眺め、季節には蛍も飛ぶという小川のせせらぎに耳を傾けよう。肩まで湯船につかり、ふーっとひと息吐いた。

それにしても、この静寂。表通りはけっこう車が走っていたけれど、ひとたび宿に入ってしまえば一切気にならない。いつぶりだろう。仕事を忘れて完全オフの時間を過ごしていられるのは。バサッ。緑の茂みで音がする。鳥だ。姿を見ようと立ち上がると、ギーッとひと声鳴いて飛び去っていった。これだけ緑が豊かなのだから、鳥たちにとっても羽を休めるのにかっこうの場所に違いない。

自分だけの時間を過ごしたい人のための宿

湯からあがると、浴衣に着替えた。朝顔の絵柄があしらわれた鮮やかな赤の浴衣に、艶のあるシルバーの帯。チェックイン時に、浴衣は選べると、たんすに仕舞われた色とりどりの浴衣と帯を見せていただいた。ふだんは渋めの色あわせが好みだが、せっかくの旅。あでやかに決め込もうと、赤い朝顔柄を選んだのだった。街着にもなる浴衣。着付けは頼めば手伝ってもらえるから、私のような着慣れないひとでも安心だ。

「選べる」のは、浴衣だけではない。

「当館では、お客さまのプライベートを重視し、ごゆっくりお過ごしいただくために事前にお好みなどをお伺いしております」と、最初に渡されたアンケート。これが、すごかった。

夕食時のお酒の種類（ビール、日本酒、ワイン、焼酎、果実酒、ウイスキ

ーがそれぞれ銘柄も選べる）、枕の好み、歯ブラシのかたさ、朝刊は何新聞がいいかなど。さらに、朝食は和食か洋食かを選べるのはよくあるとしても、和食は、白米か玄米か、お粥かを選択できる。しかも、お粥は、白粥のほか、西伊豆特産の塩鰹を使った塩鰹粥、薬膳粥の3種類から選べるという。ほかにも必要があれば、風邪薬や胃薬など薬類、爪切り、櫛、爪切りなどの類い、時刻表、観光案内、万年筆、筆ペンなど文房具……を貸してくれるとある。まるで、ホテルのコンシェルジュのようだ。

すべてを選ぶのにほんの少し時間はかかるが、部屋に入ってしまえば、途中で仲居さんがお茶をいれに来てくれたり、女将さんが挨拶に来たりすることもない。食事を運んでもらうときと、布団の上げ下げ。それ以外は、完全にプライベートが保たれる。

あとで知ったことだが、こうしたコンセプトに至ったのは、かつて18室あった「かつ家旅館」から「こむらさき」にリニューアルするときだという。社長の奥居邦保さんは考えた。「どうせなら、自分が泊まりたくなるような宿にしよう」と。誰にも邪魔されず、自分の時間を過ごしたい。できればひとにも会いたくない。この願望を叶えるため、客室すべてに露天風呂を設置し、事前に客の好みをうかがうスタイルを築いた。

平成5年のオープン当時、客室すべてに露天風呂が併設されている宿は珍しく、メディアでもたびたび取り上げられ、静かにプライベートな時間を過ごしたい旅慣れた客たちの心を今日に至るまでつかんできた。

活きのいい下田の地魚を存分に味わう

「お食事をお持ち致しました」

湯上がりに、持参した文庫本を読みながら冷蔵庫のビールをいただいていたら、入口で声がする。時計を見ることもなく過ごしていたら、もう18時か。窓の外はいつのまにか宵闇が降り始めている。そういえば、昼間よく動いたおかげで空腹だった。差し出された献立を開く。

夏の輝き　御献立　野の花亭こむらさき

先付　明日葉　桜海老　胡麻和え

前菜　紫陽花水晶　山桃ワイン漬

蛙空豆　枝豆と玉蜀黍磯辺揚げ

先椀　自家製金目鯛燻製　合鴨ロース煮

御造り　若芽豆腐

蒸し物　下田港水揚げ魚盛り合わせ

箸休め　伊勢海老　下田の天然塩蒸

洋皿　金目鯛御寿司

オリジナル　伊豆牛ビーフステーキ

変わり皿　こむらさきグラタン

焼き物　蛸カルパッチョ

煮物　地魚　下田の天然塩塩焼

酢の物　翡翠茄子

地魚南蛮漬

御飯　　止め椀　香の物　デザート

全15皿！　（注・メニューはその日によって異なる）

すぐ目の前に海が広がる下田。地元で揚がる新鮮な魚を期待していたのはもちろんだが、「伊豆牛」の文字に心躍る。客室係の平井さんに聞いてみると、伊豆の国市の一牧場でのみ肥育される希少な牛だという。生まれ育った伊豆なのに、まだまだ知らない魅力があるのだな。野菜もできるだけ地場のものをつかっているとのこと。ますます楽しみだ。

私も好きな下田唯一の地酒「黎明」（純米吟醸）も氷詰めにされて運ばれてきた。事前に頼んでおいたのだ。

この日のお造りは、バショウイカ、ホウボウ、金目鯛、キントキダイ、ムツの

5種。すべて下田港揚がり。バショウイカはこの辺の呼び名で、関東ではアオリイカのほうが一般的かもしれない。ねっとりとした甘みはイカの王様の風格。金目鯛は、下田港が漁獲高日本一を誇るこのまち自慢の高級魚。贅沢に分厚く切られた美しいピンク色の身は、脂がよくのっているがさっぱりとしてくどくない。午前のうちに伊豆急下田駅に降り立ち、まっさきに漁船が停泊している港を歩いた。いま私が目を閉じて味わっている刺身は、あの海の沖で元気に泳いでいた魚たちなのだ。その姿が目に浮かぶようなのは、新鮮な証拠であろう。

はじめまして、の伊豆牛は大根おろしで絡めた醤油ベースのソースでいただく。身質はやわらかであっさりしているので、ぺろりと食べてしまった。そして、この伊豆牛は下田の地酒「黎明」とも相性がいい。牛肉の強さに負

けない、芳醇さがこの酒の持ち味だ。

酒を飲みながら食べていると、ペースがどうしても遅めになる。平井さんが「もう少しゆっくりお持ちしましょうか」と声をかけてくれた。こちらの希望を言わずとも察してくれる、さりげない親切にじんわり心が温かくなった。チェックイン時に応対していただいた女性もそうだったが、この宿の人々にはひとを安心させるやわらかさがある。平井さんとは少し会話を交わしたが、私の母とほぼ同い年で、こちらで10年客室係として働いているそうだ。足を悪くして、そろそろ引退をとも考えたが、「こむらさきに必要なひとですから」と引き留められ、無理のない範囲で勤務を続けているという。「みなさんによくしていただいております」とはにかむような微笑みに、すっかり私は癒やされていた。

しぼりたて
初孫
純米吟醸

心のままに時を過せる贅

「こむらさき」

の布団には、安眠の魔法がかかっているのだろうか。

端正に敷かれて調えられた布団に身を滑らせると、ピンと張ったシーツにふかふかの寝具、選んだヒノキ枕のほのかな香り包まれ、横になったとたん深い眠りに落ちていた――。

早朝は、鳥たちの時間。敷地内の木立に集く鳥たちの可愛らしいさえずりで目覚めた。時刻は5時をまわったばかり。朝が苦手な自分だが、目覚まし時計もかけずに、こんなに爽やかな朝を迎えられたのは久しぶりだ。8時半の朝食までにはまだだいぶんある。朝風呂をあびて、外を散歩でもしようか。

露天風呂のふちに肘をかけて湯船につかっていると、何かが飛んできて腕にとまった。カナブンだ。セルリアンブルーの羽を私の上で休ませている。虫が苦手なひとはギョッとするところだろうが、私は自然あふれる旅館として好もしく思った。

宿から10分も歩かずに港に出られる。靴を履こうと靴箱をあけると、スニーカーのなかに竹炭の入った袋が両足に入っていた。においや湿気をとるためのサービスだろう。チェックインしてから靴を履いてなかったのでいまま気づかなかったが、細やかなサービスに小さな感動を覚えた。

朝の澄んだ空気のなか港を歩いた。途中、犬を散歩している地元のひとに行き会い、「おはようございます」と挨拶をかわす。船着き場では、

出航の準備をしている漁師さんたちも見かけた。朝日に照らされ眩しく光る海、ひゅーっと海面をなでるように飛ぶカモメ。路地をのっそり歩く猫。子どもの頃から見慣れた港町の光景なのに、旅人目線で歩くとすべてが新鮮に感じる。潮のかおりを胸いっぱいに吸い込むと、宿に戻った。

ちょうど、昨日と同じ専務が布団を上げにきてくれるタイミングだった。「ゆっくりお休みいただけましたか?」聞かれて、「はいそれはもう。朝まで一度も目が覚めることなく熟睡できました」と答えて、聞いてみた。「布団を敷くうえで、何か意識されていることがあるんですか?」と。昨夜の布団の敷方があまりに見事だったのだ。

「ひとは1日の3分の1の時間を睡眠に費やしています。その貴重な時

間を快適に過ごしていただきたいと思い、寝具のチョイスから敷方まで気を配っているつもりです」

「本当に。あんなに丁寧な布団の敷方見たことありませんでした」

感想を伝えると、ふっと頬を緩めて、「私は密かに、布団敷きをエンターテイメントにしたいと思っているくらいなんですよ」と笑った。振り返ってみれば、彼の仕事ぶりは一挙手一投足に気が入っていて無駄のない美しさがあった。でも、気づかないひとは何も思わないだろう。そんなところまで情熱を注いで、客人をもてなそうというのか。その真摯さに、私は打たれた。

朝食は、塩鰹粥を選んでいた。塩気の強い塩鰹のふりかけが白粥にの

せられ、ワカメと地海苔を添えていただく。小鉢、鯵の干物、冷や奴、茶碗蒸し、味噌汁。食後には、自家製イチゴジャムを添えたヨーグルトとコーヒー。

じつは私は普段、朝食をとらない。でも、こむらさきの朝食は、軽やかで不思議とするすると胃におさまっていった。さあ、今日もいい一日にするぞ。そんな心持ちにしてくれる朝ごはんだった。

チェックアウトは12時までに済ませればいいので、ゆっくりしたい向きには大変ありがたいサービスだが、私はもう少しまちを歩きたい。そろそろ出立しよう。

私はふたたび「こむらさき」の門に立ち、のれんの奥の、昨日から過ごし

た時間を振り返って思った。

「心、そのままにお過ごしください」

これは、最初に声をかけていただいた言葉だ。私はここ「こむらさき」で、心のままに時を過ごした。それはまるで、よどみのない川をさらさらと流れていく浮き葉のような時間であった。余計な意識が一切もたげなかったのは、旅人にとっての非日常を日常とし、立ち働く人たちの完膚なきまでの心配りのおかげなのだと思う。

野趣と洗練のバランスを考え抜いた玄関口の緑たちもまた、こむらさきのもてなしの大事な要素に違いない。名残惜しくコムラサキの枝を指で揺らすと、私は下田の繁華街へ向かって歩き出した。